

比庵佳境の会

窓日彫特集



清水 固宅にある窓日彫の大机

和室で座って使用する大机を、洋間で腰かけて使用するために脚を伸ばした

右の書

狐は穴あり空の鳥は巢あり

中の書

人には少し銭のあれかし

左の書(歌)

種まくと平らし土のうつくしき

八十一比庵

毎日佳境

比庵

窓日彫特集について

比庵佳境の会長 清水 固

清水比庵は歌人としてスタートし、書と画も含めた三位一体の芸術家として現代でも高く評価されていますが、芸術の幅を広げることに熱心だった比庵は窓日彫、絵手紙、歌碑などの分野でも実績を残しています。そこで比庵佳境の会13号は窓日彫特集として組んでみました。

窓日彫は比庵愛好者ならご存知かと思えますし、文献としては濱崎 道子様の「窓日彫拓本集」がありますが、これを開発した矢部犀洲の事、窓日彫の制作内容など詳細は私を含めて意外に知られていません。本特集は矢部犀洲については美術商の豊池 勇氏、窓日彫の内容については篆刻家の山本 陽一氏に執筆していただきましたのでご覧ください。今後は適時に絵手紙、歌碑などの特集も企画してみたいと思っております。

矢部犀洲と窓日彫

笠岡市美術商 豊池 勇

一 「矢部犀洲」の誕生

矢部犀洲先生は本名を矢部高義さんと言う。(以下は敬称を略させて戴きます。)

大正八年(一九一九年)に岡山県西大寺市駅前町三四七(旧住所名、後に岡山市に編入)に生まれる。

幼い時から、美術に優れた才能の萌芽を放ち小学校を終える時期に教師が家庭まで出向き、家の者に美術の専門への進学を薦めたと云う。絵が好き、書が好きであった矢部少年は成長し、やがて徴兵検査を受ける。これから運命は禍福が糾える縄のごとくに展開して



仕事場の矢部犀洲

行く。先ず、徴兵検査で肺結核の診断を下される。これにより、彼は出征することなく病氣療養の日々を余儀なくされる。青春の日を岡山県の早島の療養所にて送る事になる。当時「不治の病」と恐れられた病氣を得て戦地に赴く事なく療養する事となった心中は如何ばかりであったろうか。療養所では、肺結核の治療と共に様々なカリキュラムが用意されていた。

ここで矢部青年は鳥城彫を指導する木口九峰により、施漆木工芸の世界に出会う。更に療養所で矢部の運命を変えるもう一つの大きな出来事がある。それは治療に当たっていた女医・山下裕子とのめぐり逢いである。矢部は社会生活を送れるまでに治癒し二人は家庭を設ける。肺を患った経緯から、生業の選択肢が限られる身に天性の美的感性と療養生活中に身に付けた施漆木工芸の技は天の恵みであった。工芸作家・矢部犀洲のスタートである。

矢部犀洲の生まれた西大寺は西大寺観音院の縁起に依ると、その始まりは「犀戴寺(さいだいじ)」とある。紀伊の安陸上人が観音寺建立の為に来航の途中で、犀の角を持つ



比庵と犀洲

龍神が現れ「この角を持って地を固め本堂を建立せよ。」と告げ開山に至ったとの事。西大寺観音院は通称「裸祭」として有名で旧暦正月に締め込み一つの男たちが神木を奪い合う壮麗な祭りとして有名である。
矢部は生まれた土地の歴史に因み、犀（さい）の洲（しゅう）は（しまの意）と名乗ったのである。

二 「窓日彫」の誕生

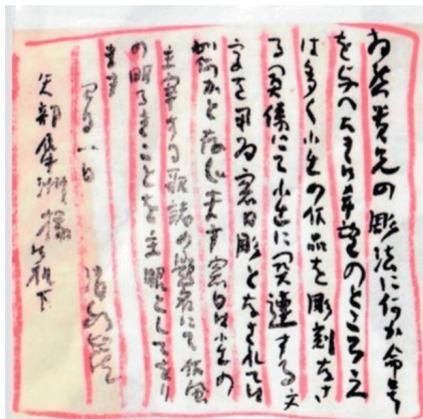
地元岡山の日本画家・東原方遷（ひがしはらほうせん）の絵を基にした作品とか、書の師匠である大原桂南の字を彫った作品、交流の有った岡山の高僧・松坂帰庵の揮毫したものを作品に手掛け発表し生計を保つ。
元より芸術に造詣が深い犀洲は清水比庵の作品に出合い啓示を得たかのように運命が大きく動き出す。当時、既に人気を博していた清水比庵作品は入手が困難であった。「清水比庵先生の世界を自分の手で工芸作品にした。」「この祈りにも似た願いを既に交流のあった岡山市内法界院の住職・松坂帰庵師に語る。この事から、出合いの序曲は始まる。帰庵と比庵は予てより交流があった。

帰庵師が比庵と犀洲の引き合わせをお膳立てした。そして、比庵に拝眉の機を得る。犀洲は比庵の世界を工芸作品で発表させて頂きたいと懇願する。比庵は躊躇した。それは自分の歌・書・絵を果たして工芸品で表現出来るものであるのかと疑問を感じたのだろう。
第一、犀洲の技量は不明である。
比庵は犀洲の熱心な要望に、それでは一つだけと了承し後日の結果を見る事とする。仕上がったものは予想を上回る出来栄であったのだろう。比庵は大いに満足し、以後は犀洲宛に制作作用の下絵を送るに至る。

三 窓日彫の命名とその評判

比庵は自作の歌・書・絵の世界を工芸と云う新たな世界で表現できる事に歓びを見出した。比庵は犀洲の求めに応じ、自分の主催する短歌会「窓日」の名を犀洲に与え「窓日彫」と命名した。後年、清水比庵展を開催の折にそのパンフレットには、「窓日彫」の簡所に清水比庵・矢部犀洲「合作」と記している。比庵が犀洲の技量を高く評価していたことが窺える。その制作分野は益・卓・茶托・菓子

比庵から犀洲への手紙
窓日彫の命名



これでは見えないが此の中に約30人程がぎっしりつまって開場を待った訳・・・
作品の争奪戦ご想像にまかせます

四 終末

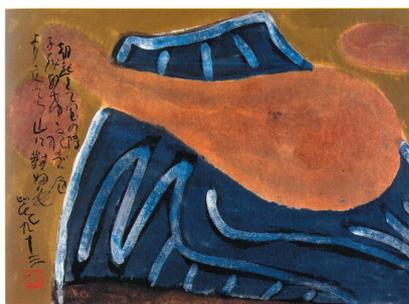
比庵は日頃から、「芸術家は長生きが勝負」と語っており、年を重ねて豊かに膨らむ芸術性を大切にしていた。生活は鍛錬と摂生を旨とした。それを範として犀洲もまた自戒の日々を送る。若くして肺を患い、その片方しか機能していない身体で体力維持に相応しい運動は限られる。そして彼は社交ダンスを選ぶ。

その日も三年前から始めた社交ダンスのレッスンに犀洲は出かけた。不運にも自宅を出て間もなく、自動車と接触し帰らぬ人となる。昭和五十五年二月十七日の事、享年六十一歳。

遺族によると、「行つてきます。」が別れの言葉となったと云う。比庵が他界して五年後の事であった。

という訳で「窓日彫」は制作年数が僅か二十年足らずで終わった。しかし残された作品は多くの人に愛されて今日に至っている。

朝起きて窓の障子をあげれば
庭より立てる山に對ふも
比庵九十三



朝起きて窓の障子をあげれば
庭より立てる山に對ふも

をすらすらと読んで、「これはわたくしの御殿場の家の風景をそっくり詠んである」と言はれたそうである。此歌は小生の歌集を刻版して下さった大本琢寿先生（岡山大学教授、考古学者）の田舎の寺に泊まった時の歌であるけれど、これを御殿場の家の歌とすると、この山といふのは富士山かもしれない。さうするとこの歌も実に素晴らしい歌になるであろう。
その後比庵は富士山の画の画賛にこの歌をしばしば使っている。

窓日彫

変刀と摺り漆による 矢部犀洲の発明

篆刻家 山本陽一

「窓日彫」の第一印象

私は篆刻をやっている、木額も小さいものは彫っているので、板に書を彫ったものには関心がある、しかし、漆芸は別で、漆というものの正体がわからない。身辺にある漆器は汁椀だけという生活をしていて、漆芸の知識はゼロに近い。漆器類への関心も薄い。が、窓日彫を初めて見た時はびっくりした。丸刀で一気に比庵の歌が彫ってある。刀痕から丸刀の刃先が板面を走る音が聞こえるのだ。子供が見たら「僕にもできそう。やってみたい。」と言うかもしれない。だが、丸刀で字を彫った漆器などこの時まで見たことがなかった。

しかし、である。比庵の書画が好きなる者として見れば、比庵の書の線質を生かす彫り方は、これ以外に無いと思つた。

作者の矢部犀洲もきつとそうひらめいて、やってみたら、比庵の書が立ち上つて、呼吸しているのを確認したに違いない。

以上が、窓日彫を漆芸の門外漢が初めて見た時の感動である。後日、矢部犀洲の遺族から、犀洲が丸刀の刀先に手を加えて、少し尖らせて「変刀」と呼んだと伺つたが、それ以前のズブの素人としての私の実感を述べたかったので、あえて最初の感想を「丸刀」にした。以後は「変刀」にします。

一 矢部家訪問

昨年、清水固様が、豊池さんと私に、会報で窓日彫の特集をやるうと言われた時、はたと困つた。比庵芸術愛好者は「窓日彫も好き

だ、たいへん良い。」と言うが、その理由を具体的に聞いたことがない。作者矢部犀洲の漆芸歴もわからない。そこで笠岡にお住いの豊池さんに、同じ岡山県ということで犀洲について何か手掛かりがないか調べて下さいとお願ひした。豊池さんからは昨年の夏、犀洲のご遺族と連絡が取れ、訪問して遺品を見せていただいたと吉報が届き、十一月一日、清水固様はじめ一行五名での矢部家訪問が叶つた。胸ときめかせて犀洲旧居の前に立つた。玄関の庇が、簡素な門のように張り出し、門柱の両脇の扉に對聯(門の両脇に對句を記したもの)がかかっていたが、風化して判読できなかった。文人の住いを偲ばせる風情。座敷に通されると、床の間に比庵の「風景」の茶掛け、その前の窓日彫の大きい横額にはこぼれんばかりに栗、桃、林檎、蜜柑、葡萄、柿、石榴、枇杷があざやかに彫られ、春といひ秋といひつゝ一年の

移りゆくこそうつしくあれ

八十比庵 犀洲刀

と。周囲には窓日彫の盆や完成間際の「洗心」の大字の木額(陽刻と陰刻の二点)や、「料理」の木額(浅い蒲鉾彫)や、



数々の窓日彫の下絵が。また、犀洲の書軸「花間鳥自啼」が掛かり、長押には犀洲の書の師、大原桂南の扁額「技生研鑽」、柱にも桂南の書を彫つた聯が掛かっていた。また犀洲の好みが、熊谷守一がねずみを描いた小額や、香月泰男が

紫陽花と蝸牛を描いた二点の油彩画もあつた。私も香月の小品は好きなので旧知に会つた気がした。縁側には沢山の彫刻刀(大小の変刀など)や漆刷毛等もあり、一度に犀洲の美の世界に放り込まれ、頭の中が困乱した。これらをどう順序づけたら窓日彫作家犀洲を描けるか、宿題のお土産が余りにも多い半日であつた。その上、おいしい料理をこちそうになり、犀洲ご遺族に大変お世話になつてしまつた。またと無い機会の設定に尽力された豊池さんにも感謝です。

二 窓日彫——変刀彫に摺り漆

(拭き漆ともいう)

(摺り漆とは木地に生漆を何回も摺り込め、仕上げの技法のこと)

さて、ようやく窓日彫の特徴を考えるとこゝろまでごぎつた。窓日彫は言うまでもなく、命名者清水比庵の書画を矢部犀洲が変刀で彫つて漆をかけた木工芸品である。絵と短歌や、「毎日佳境」などの字が彫つてある。両者の線の太さ(絵の場合は輪郭線)は同じで、線質(線の運筆の呼吸の長さなど)も同じである。

そこで、まず比庵の書の線質の特色は何か。普通の書は起筆(打ち込み)があり、次に筆の先(表)と腹(裏)で一定の幅の線の輪郭

縦画の場合、左側が筆先(表)、右側が筆の腹(裏)
横画の場合、上側が筆先(表)、下側が筆の腹(裏)

をつくり(線の本体部分)、収筆で止めたり払つたりするが、比庵の書の線には起筆・収筆もなく本体だけがある。打ち込みや払い余計なもので、これが目立つと書がうるさくなる。比庵の書がのたくつてもうるさくないのはそのためである。いきなり線の本体で始まり、そのままパツと終る。しかも比庵の線は呼吸が長い。チマチマしない。ゴツゴツし

ない。力まない。明るい線質である。

次に文字の線の彫り方であるが、陰刻(文字を平面からへこませて彫る)の場合大略次の二つの彫り方がある。

薬研彫・断面がV字になる

彫り方。切り出し刀(小刀)で線の輪郭部に斜めに刀を入れ(縦画なら左右、横画なら上下)、押し刀で往復一度で線幅を彫る、小字に多い彫り方。

蒲鉾彫・少し大きい字や大字の彫り方。

線幅の輪郭線を切出しや鑿で斜めに土手を切り込み、中をなだらかな蒲鉾状に漑う。

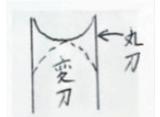
この二つの方法は一定の幅の線を輪郭から作つてゆく方法で、でき上つた線質が、薬研彫では鋭くなり、蒲鉾彫では固定化しやすい。ところが、比庵の絵(風景は除く)に添えられた歌は、連続でなく単体であっても、呼吸が途切れない。いきなり線本体で始まって



大小さまざまな刀(変刀ほか)



犀洲は書も堪能であったことが、「花間鳥自啼」の書軸を見ればよく分かる。線の呼吸が長い。字に嫌みがない。書の力量、書の線質を見抜



も固くない。この比庵の書の線質は一刀で線幅を彫れる丸刀でなければ出せない。犀洲はひらめいたのではない。しかも丸刀の線の幅の輪郭は鋭くはなく固くもない。ただ、

丸刀の刃先のままだと木地をひっかけて、小さく大きくできやすいので刃先を少し尖らせて変刀にしたのである。変刀が比庵の線質を呑み込んで、盆の上に、小机の上に比庵の線質を再現して見せた。そして、この線質を生かすために犀洲は摺り漆（拭き漆）の技法を用いた。生漆で木地の自然の表情を生かしたから、一回でしかものびのびと線の幅を表現できる変刀の刀痕も生きた。漆はかけられていても彫り面に風が吹き込み、彫られた字が呼吸している。色漆に閉じ込められたら、字が窒息する。摺り漆の技法は、一見簡単に見えるが、後日、ご遺族から、その工程表に説明を加筆されたものをいただき、約二十工程もある手間のかかる技法だとわかった。しかも完成した摺り漆の作品は手間の煩雑さを感じさせず、木地の美しさを一番よく表現した技法で、窓日彫も正にそのとおりで、素材となった比庵作品さながらの、正に比庵・犀洲の合作である。なおご遺族は犀洲から窓日彫を摺り漆にした理由を聞いていないとの事。

矢部犀洲書 花間鳥自啼 犀洲書



漆を塗る刷毛

く力が、窓日彫の原点にあると思う。

三 窓日彫の工程

窓日彫の工程について、ご遺族からご教示いただいたので次に記します。

①木地は、犀洲が図案寸法を書いて木地師に渡す。木地は樺・榎・栗等。木地師は岡山と西大寺の二人。丸盆、角盆は高松の方のこと。

②木地についている螺旋や傷を木ベーパー（紙ヤスリ）＃800・＃1000で磨いて、木地の表面をきれいにする。

③木地と下絵の間に複写紙（和紙に水で溶いた弁柄を塗ったもの）を挟み、下絵保護のためセロハンを置いて鉄筆で下絵を木地に写し取る。比庵が描いた下絵は、使われる物としての器物にあしらうものなので、簡潔に描かれている。

④変刀で線の太さを一度で決めて彫る。この彫り方は、窓日彫が初めてであると思うとのこと。

⑤このあと摺り漆（拭き漆）の工程に入る。生漆での下地作りから、絵の色塗りを経て仕上げの艶付けまで、塗っては乾くまで置いて磨くの繰り返して約二十の工程があり作品一点が完成するまで約一カ月はかかっていたそうである。

なお、落款印は彫らずに朱で書いている。小さく「犀洲刀」と薬研彫が入っている作品もある。

摺り漆の技法で仕上げる窓日彫は、木地が見えるので色漆よりも手間がかからないように思えるが、とんでもない。たいへん手間のかかった漆工芸であると気づかされた。気温や湿度にも影響される漆という生き物を扱う根気と練度を必要とする仕事である。

四 木額・聯

窓日彫以外の、文字を彫った犀洲の作品にも触れておきたい。

①松坂帰庵の書を彫った盆

岡山市の法界院住職であった帰庵は、比庵とも親しく、犀洲に比庵を紹介したのは帰庵である。窓日彫を発明する前に、犀洲は帰庵の書を盆に彫っている。四字の文字で、慈雲尊者ばりの書だが、帰庵は潤筆で作らない。犀洲はそれを浅い蒲鋒彫にして、摺り漆の技法（色は少し濃い目）で仕上げていく。帰庵の大字の調子がよく出ている。

②木額「洗心」

比庵の大字の書「洗心」を、陽刻と陰刻二枚に彫っている。もとになつた比庵の書を見てはいるが籠字

洗心 比庵八十（陰刻）
未完成



郭をなぞって籠字にした文字）を取る段階で潤潤（にじみとかすれ）を整理して彫っていることがわかる。私が木額を彫るのと同じやり方なので、矢部様宅で拝見した作品のなかで一番興味を持った。しかも二枚とも完成一步前の未完成作品なので、思わず踊るような字づらを撫でてしまった。陽



刻の余白の渡いは平刀、陰刻はごく浅い蒲鋒彫で大きいリズムの刀痕がよい。陰刻の方は文字に胡粉（貝殻でつくった白色顔料）を入れ、陽刻は普通は金箔を貼るが、どうするつもりだったのか、後髪を引かれる思いで見入った。

③木額「料理」

比庵の書を浅い蒲鋒彫にしたもの。以前墨の美術館で拝見した色漆で仕上げた木額と同じ書を彫ったもの。こちらは文字が胡粉。落款の左に小さく薬研彫で「犀洲刀」と緑の絵具がさしてある。

④聯「一片冰心在玉壺」

比庵の書で、唐の王昌齡の「芙蓉楼にて辛漸を送る」の句。名利を求めず、清い心であることのとえ。比庵と犀洲の座右銘のような言葉。豊池さんの店で、一目見て



一片冰心在玉壺 比庵七十七書 犀洲刻之

気に入る、譲っていただいた。私もこの言葉にあやかりたい。一四一cm×一〇・四cm×〇・四cm。極めて浅い蒲鋒彫。文字は落款の下の「犀洲刻之」の薬研彫の小字まで胡粉。朱文印として彫られた「比庵」の八分角の落款印は、朱は入っていないがのびのびとした出来栄。毎日、比庵と犀洲に見守られてありがたいことである。

五 終りに

以上窓日彫等についての拙い私見を述べましたが、至らぬところはご指摘をいただければありがたいです。また、ご遺族の方にはいろいろご教示いただき大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

窓日彫のかずかず



茶托
清和
平安
高橋
長風
有餘
八十一比庵



硯箱
椿
比庵



文箱

ほのほのとむらさきこぼふ 朝ほらけ
うぐいすの聲 山よりきこゆ
比庵八十四



壁掛
毎日佳境
八十一比庵

わが庭の山吹の花ほかに見る
花もいらざる 花盛りなり
比庵八十四



丸盆

秋風は君が山河へ吹きゆかむ
蕭條としてうつしくして
比庵八十八



丸盆



茶道具入れ

徳不狐必有隣



茶櫃

天地はひろくあれども年老いて
ひとりあそびをするところかも
八十一比庵



菓子器



小机
柿

豊秋の野をうちひろげ 家毎に
柿の木高く 熟れてあるかも
比庵八十四

下絵と角盆

有朋自遠方来不亦楽乎
比庵八十八



窓日彫 下絵と小机

朝日いま上らんとしてくれなぬに
東なかばを染めぼかしたり 比庵八十八



朝明の雲くれなぬにちらばりて
細くとがれる月をかきさす 比庵七十九



清水比庵の歌（七）

「窓日」編集長 秋葉 貴子

山高く水長きその一とこ
銀にぼかして月のぼりたり

川合玉堂と清水比庵の交流が始まったのは、昭和十七年頃（比庵六十歳）で、たちまちにして書簡の交流がひんばんに行なわれ、お互いの絵と書の合作を発表するまでになった。両者の基本は、比庵の書（歌）に玉堂が絵を画くという順であったという。この作品は玉堂の絵と、比庵の歌でありたつての合作である。

比庵は昭和十七年当時、「山高水長」の言葉を好み、よく墨書していた。そしてその言葉の意味を「高潔の士、川合玉堂」に見立てていて、この歌はその意を込めた一首といわれる。そしてその歌意を玉堂は直ちに絵に表現し、そこで両者一体の作品が生まれた。たたなる山、そして空に画かれたおぼろ月が美しい。歌も風景にマッチしている。因みに玉堂は比庵の歌の力を信じ、しばし



月上がる（川合玉堂合作）
製作年不詳

ば自作の歌を送り添削を所望したという信頼篤き間柄であったことが偲ばれる。

上る日の彩る土の金色に
わが八十の影を描くも

この歌は短冊掛けに納められて今、わが部屋に掲げてある感銘歌である。

朝日ではあるが、あえて「上る日」として、その勢いを見せ、その射し初めた光が、地面を金色にいろどっている、輝かしい。その金色に立つ比庵の姿まで、尊く偲ばれる。

しかし、かえりみたととき、そこに在るのは「わが八十の影」である。昭和三十年代終りの頃の作と思われるが、多分正月か、誕生日かの作と想像する。昭和三十年代の、八十という年齢と平成二十九年現在の八十は、同じ年齢ながら、その受け止め方は大分違うわけだ、いよいよわが人生も八十に達したという認識に立つての歌ではないかと思われる。

そう思うと「わが八十の影」に或るさびしさがよぎる。いやそうではなく、八十に達した大いなる悦びに、些かの哀愁を滲ませた歌であるという感じも否めない。以上

会費納入のお願い

令和二年度会費を下記に納入されますようお願いいたします。

一口、1,000円（複数口歓迎）
三井住友銀行 鶴見支店
普通 7061558
名義 クボタノブユキ

なお現金で会長「清水固」宅（下記）に郵送されても結構です。

今後の比庵展のお知らせなど

一 比庵展開催時期

例年五月末から六月初旬にかけて東京都品川区西大崎で開催していた比庵展はオリンピックの関係で秋（一〇月下旬から十一月頃）にずれ込みます。（コロナウイルス騒ぎで例年通りの時期の開催は困難ですがこれは偶然です。）

これに伴い墨の美術館での比庵展も秋に開催予定です。詳細は次号（十四号）でお知らせします。

二 高梁比庵会の短歌の部比庵大賞

比庵大賞は隔年ごとに開催されていますが、次回は明年（令和三年）夏に開催予定です。応募要領等は事務局（〇八六六一二一〇一八〇高梁市文化交流館）にお尋ねください。

三 会報十四号の発行予定は今年一〇月です。

比庵佳境の会

会長 清水 固（清水比庵の孫）
〒247-0022 横浜市長区庄戸 3-5-18
TEL&FAX 045-893-8932
携帯 090-6340-0181
メール katashi-shimizu@hat.hi-ho.ne.jp
URL: http://www.hat.hi-ho.ne.jp/katashi-shimizu/
幹事：比留間 哲生
〒247-0022 横浜市長区庄戸 3-25-7
TEL 090-4608-0488